

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

① 言葉がきたえられるとは、どういうことなのでしょう。あるいは、きたえられた言葉とはどのような言葉なのでしょう。

それを、一言で説明することはできません。わたしたちは、日常の生活の中でも、小説や詩集の中でも、とき折、^②ありふれた言葉なのに、ずしりとした重さを感じたり、いつまでも心に残ったりするという経験をします。ひとつの言葉の前で立ち止まり、その言葉の周囲にうかび上る風景の中に、特別な意味がかくされているような気持ちになることもあります。

橋の向こうからみどりのきれはしが

どんどんふくらんでバスになって走ってくる

待ち続けたきつい目をほっとほどういて

五人、六人が停留所へ寄る

六人、七人、首をたれて乗車する

待ち続けたものが来ることはふしぎだ

来ないものを待つことがわたしの仕事だから

(小池昌代「永遠にこないバス」部分 詩集『永遠にこないバス』所収)

小池昌代の詩を読んでいると、これは、わたしがもう忘れていたけれど、どこかで見た風景だと思うことがたびたびあります。

詩を読むということの楽しみのひとつは、そうした、忘れてしまったことさえ忘れているような風景に不意に出会うことがあるということかもしれません。

わたしにとっては、「みどりのきれはしが、どんどんふくらんでバス」になる光景が、その忘れてしまった少年期を思い出させてくれるのです。

この詩は、どこか地方都市のバス停留所の、ありふれた日常的な風景を描写したものに過ぎません。ただ、「永遠にこないバス」というタイトルが、この日常的な風景に、ちよつとした希望と不安を付け加え、この短い詩が、わたしに、長い時間についての思い、つまりは人生についての物語を喚起させてくれるのです。わたしたちは、この詩のように、「永遠にこないバス」を待ち続けながら、成長してゆく。そして、気が付いたときには、待っていたことさえ忘れて、わたしたちは次の駅まで運ばれている。

なんとも、うまい詩だと思いますが、この詩に対するとらえ方は、読者の数だけあるだろうし、それでよいのだと思います。

③ わたしの場合、その詩が切り取った観念や風景を、必ず自分の現実の文脈の中に置き直していることに気が付きます。

そこで、もう一度、なぜ、この詩がわたしに強い既視感をもたらしてくれるのかについて考えてみます。この詩は、まったくありふれた日常的な光景の描写であり、^aヘイイな言葉が、無理なく重ねられているだけなのですが、そうすることで、小池昌代という詩人は見えないものを見るという経験をわたしにもたらしにくれていることに気が付きます。

見えないもの、それは□なのですが、詩人が詩人になるのは、見えないものが見えるときなのかもしれません。

でも、見えないものが見えるだけでは、ひとは詩人にはなりません。見えないものを、他人にも見さ

せることができること、つまりは、見えないものを見えるように表現する奇術を使うことで、詩人になるのでしょう。

ところで

きょうのあさは

りんごをひとつ　　てのひらへのせた

つま先まで　　きちんと届けられていく

これはとてもエロティックなおもさだ

地球の中心が　　いまここへ

じりじりとずらされても不思議はない

④ そんな威力のある、このあさのかたまりである

(小池昌代「りんご」部分　詩集『水の町から歩きだして』所収)

もちろん、りんごひとつの重力が、見えないものですが、この詩で見えないのはその重力だけではありません。

この詩のラストに「あのひと　もう会わない　そうして　きょうのあさは　りんごをひとつ　てのひらへのせた」とあります。つまり、リンゴの重力とは、「あのひと」の不在です。

わたしたちは、この詩を読みながら、恋人だったひとの不在が、リンゴの重さに代わるといふ奇術を見せられることになるのです。「不在」というものをどのようにしたら見えるものにできるのか。このとんでもなく難しいテーマを、小池昌代はいとも簡単そうにやっつてのけます。

見えるものと見えないものをめぐって、小池昌代はその詩的な感覚をときずましていったのだろうと思います。

わたしは、詩を読むときに、その詩の光景を、自分の現実になおして読むと書きました。わたしの現実とは、見えるものに囲まれ、形のあるものを確かなものと信じられる、「いま・ここ」の世界です。しかし、見えるものがあるのは、見えないものがあるからであり、形のあるものが確かだと思えるのは、形のない不確かなものが存在しているからであり、輪郭のはっきりとした外側があるのは、輪郭を持たない内側があるからだということ、しばしば忘れてしまうのです。

きたえられた言葉は、いつも、見えるもの、存在、充足、正確さというもののハイゴに、見えないもの、不在、欠落、おくれをミチビき入れます。そうすることによって、⑤「いま・ここ」の世界は、「いまではない・ここではない」「世界によって成り立っている」ことを教えてくれます。

※ 喚起…よびおこすこと。

既視感…経験したことがないのに以前経験したことがあるように感じること。デジャビュ。

問1 線abcのカタカナを漢字に直さない。

問2 線①とありますが、筆者は小池昌代という詩人がどのようにして言葉をきたえたと推測していますか。最も適当な一文を抜き出し、初めの五字を書きなさい。

問3 線②とありますが、その例として適当でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 引退試合で聞いた審判の「ゲームセット」の言葉とともに、選手として活やくした私の中学時代も終わりを告げた。

イ 真っ赤な顔をして泣いている生まれたてのわが子を見て、だから「赤ちゃん」というのだとわかった。

ウ 体力の限界までがんばってつかれきった時、「はい、休けい」と言われ、休けいの大切さを実感した。

エ 母の日に弟と二人で作ったカレーライスにお母さんは「おいしい」とにっこり笑って喜んだ。

問4 線③とありますが、筆者はどのようにとらえていますか。次の文の1・2にあてはまるように、それぞれ文中の一語を入れなさい。

バス停留所の日常的な風景の中に1を思い出し、2についてあれこれ考える。

問5 にはあてはまる語を、これより前の文中から漢字二字で抜き出さない。

問6 線④とは何ですか。詩中から一語で抜き出さない。

問7 線⑤とありますが、この考え方に近いものはどれですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア この景色を晴れ晴れとした気持ちでながめることができるのは、がんばってきた昨日までの日々があるからだということ。

イ 自分が正しいと思うのは、世の中に正しくないものが存在するから正しいと判断できるのだということ。

ウ ハスの花が美しく咲いているのは、よごれた泥の中に根をおろしているからだということ。

エ 氷山が海面にうかんで見えるのは、その下にかくれている部分があるからだということ。

二次の文章は、主人公の「星」が両親の夫婦げんかがつらくて家を飛び出したが、男友達の「ハナ」と話をして落ち着き、家にもどる場面です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

家まで、残すはまっすぐな一本道を行くだけになった。街灯のあかりがつくる丸い円の真ん中で、走り続けてきた足をゆつくりと止める。何度も深く息を吸った。乱れた呼吸はそれでも治らないけれど、胸に手を当てるとわかる、心臓がとても大きな音で鳴っていること。走ったせいだけじゃない。もつと別の理由で、どんどん速く波打っている。

①「……………」
一度足を止めてしまえば、そこらなかなか進まなかった。行かなくちゃとわかっているのに頭と体が一致しない。こんなにずっと走ってきたのに、今は足が鉛みたいに重かった。どうしても前に進めなくて、後ろをふり返りそうになる。

「ハナ」

でもだめだ。ふり返っちゃいけない。行くのがこわくても、行かなくちゃいけない。ちゃんと前へ。前を向いて。ぎゅつと、②小さくふるえる手をにぎりしめて、息をはいて前を向いた。

③「目を、見開いた。」

「星!!」

ずっと先の暗い道から、わたしを呼ぶ声がした。遠くの街灯の下でかすかにうかび上がる姿に、前へ進もうとしていた足がまた止まる。

「お母さん？」

見まちがいで、空耳かと思った。だけど確かに向こうからかけてくるお母さんの姿と声がわたしに届いていた。近くなるにつれてよく見えてくる表情は取りつくりった笑顔でもおこった顔でもない。

④「顔をしていた。」

「星!!」

もう一度、お母さんはわたしの名前をさげんだ。そしてわたしが、お母さん、と答える前に、かけ寄ってぎゅつとわたしをだきしめた。

⑤「また、わたしの体は動かなくなった。おどろいて、体だけじゃなくて頭の中まで止まってしまっても、わたしより少し背の低いお母さんのかたが、ふるえていることだけはわかっていた。」

「星！ ごめん、ごめんね……………」

痛いくらいにだきしめながら、わたしの耳元でお母さんは何度もそうくりかえした。

何に對しての「ごめんね」なのかはわからない。でもそれは久しぶりに聞く、お母さんからわたしへの、⑥「本当の言葉なんだって気付いた。」

「おい！ いたのか!？」

聞き慣れた声がもうひとつひびいた。お母さんのかたごしに、走ってくるお父さんの姿が見えていた。

「星!!」

目が合うと、お父さんはお母さんと同じようにそうさげんだ。

そしてわたしをお母さんごと、きつく腕の中に包んだ。

「どこに行ってたんだお前!!」

ふるえる声でお父さんはどなった。わたしの耳元で、小さな声でだって聞こえるのに大きな声で。それはいつも、どんな遠くにいたって聞こえるだけで体が緊張する声だ。

「こんな時間に出歩くなと言ったばかりだろうが!!」

でも、今はなんてことはない。こんなに⑦そばにいるのに。ちがう。こんなにも⑧そばにいるからだ。

「お父さん、泣いてるの？」

「泣いてるわけないだろう」

「でもさつきから鼻すすってるよ」

「お父さん花粉症なんだよ!」

ぶつ、とふきだしたのはお母さんだった。つられてわたしもちよつと笑うと、お父さんはもう一言いながらゆつくりと腕を下ろした。

静かな道の上、むぎゅつとひとつになつていたかたまりが解けていく。

お父さんは涙目で、ちよつとバツの悪そうな顔。お母さんは必死で笑いをこらえた顔をしている。そしてふたりともとても優しい表情になって、いっしょにわたしを見た。

「帰ろう、星」

片手ずつのばされたふたつの手のひら。小さいころを思い出す。出かけるときはいつだってこうして、わたしは大きなふたりにはさまれて歩いてた。世界で一番しあわせなのは自分だって、ウタガいもしなかったあのとき。大好きなふたりの間こそが自分だけにゆるされた⑨特別な場所で、そこが世界の中心なんだと、心の底から信じていた。

そうじゃないと今は知っている。世界はもつと広くて、きたなくて、不確かなものばかりで。自分はいつだってはしつこの方にまぎれている。

それでも、そんな今になつても。変わらないのは、やっぱり、このふたりの真ん中に立つのはわたしだけの特別なんだということだ。

「うん、帰ろう」

夜でよかった。高校生にもなつて両親と手をつないで歩くだなんて、さすがに人に見られたらはずかしすぎる。それでも手ははなさなかった。

お父さんは、もうそんなに見上げなくなった。お母さんは、いつのまにか背をおいこしていた。変わってしまったんだなあとと思う。変わっていくんだなあとと思う。いつまでも同じままじゃられない。世界は⑩コクイツコクと昨日を消して、新しい明日へと向かつて行く。

でも、変わり続けながらつながり続けるものもある。わたしがわたしであるように。

姿が変わって心が変わっても、それだけは変わらない確かなもの。

だけどあのときと同じだ。わたしの手が成長しても、つないだ手はやっぱり大きくて、それでいて温かい。安心できるぬくもり。心から信頼できる場所。大切な、家族のいる場所だ。

家に帰ってから、お父さんとお母さんにこれまで思っていたことを少しずつ話した。いつからけんかをするのが多くなつたふたり。どなり声を聞くたびに心臓がぎゅつと痛むから、目を閉じて耳をふさいで、布団の中で小さく丸くなつてたこと。昔のようにもどつてほしいとずっと思っていたこと。だけどもどりはしないって、本当はわかつてたこと。もうわたしはいらんじやないかって考えたこと。自分のことが、とてもきらいだったこと。

話したいことはなかなかまとまらなくて、とぎれとぎれなわたしの言葉は伝わりづらかつただろうと思う。自分でも何を話してるのかよくわからなくなつたり、口に出しながら「わたしこんなこと思ってたんだ」って、考えたりなんかした。

リビングはまだぐちゃぐちゃなままだ。料理は散らばってるしお皿は割れてるしテーブルは斜めに置かれてる。さつきそれを見たときは、こんな場所知らないって思った。自分の家じゃないって。それなのに変わらない状況の今は、やっぱりここが一番、自分の家だなんて感じる。

悲惨な状況だけじゃない。カマいなしに、わたしたちは斜めのテーブルの定位置に座ってたがいていた。

わたしの目の前にお父さん。斜め横にお母さん。四角のテーブルにコの字型。わたしがおぼえてる一番古い記憶のときよりもっと前から、変わらない家族の定番の位置。

久しぶりにちゃんとふたりを見た。お父さんはいつのまにかめじりにしわが増えたし、お母さんは前にも増して白髪が多くなった。けどわたしを見てくれる瞳は変わらなかった。

問1 線 a b c のカタカナを漢字に直さない。

問2 線①は、「わたし」のどのような状態を表していますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア こわさで何も考えられず自分自身を見失っている状態。

イ 自分の思いを行動に移すことをためらっている状態。

ウ 走ってきたので鼓動が早く息苦しく声が出ない状態。

エ 自分の気持ちが変わらなくてとまどっている状態。

問3 線②とありますが、

(1) 「小さくふるえる手」から読み取れる気持ちは、他にどのような形でわたしの身体に表れていますか。文中から二つ抜き出さない。

(2) この身体の状態が変化したのは何がきっかけですか。文中から一語で抜き出さない。

問4 線③を説明したものとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 向こうから来るのはお母さんかと思い、おどろきで目を大きく開けている。

イ 暗い道でだれがわたしを呼んでいるのか確かめようと、目をこらしている。

ウ もうふり返らずに前へ進もうと決意して、しっかりと先を見すえている。

エ 急に現れたお母さんの真意を理解するため、その姿をよく観察している。

問5 にはどのような言葉が入りますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 興奮でさけびだしそうな

イ 心配でひきつりそうな

ウ 本当にうれしそうな

エ 今にも泣きそうな

問6 線④とありますが、今度はなぜ動けなくなったのですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア お母さんがわたしより背が低くなっているのに気づき、動いてはいけないと思ったから。

イ お母さんのかたがふるえているのが分かったので、心配させて申し訳ないと思ったから。

ウ お母さんがわたしをあまりにも強くだきしめたので、動けなくなったから。

エ お母さんの素早い行動にびっくりしたので、何も考えられなくなったから。

問7 線⑤とありますが、お母さんのどういうことに気付いたのですか。二十字以内で書きなさい。

問8 線⑥⑦のちがいを説明した次の文の 1・2 にあてはまるようにそれぞれ一語を入れなさい。

線⑥の「そば」は 1 が近いということだが、線⑦の「そば」は 2 が近いということだ。

問9 線⑧とありますが、どのような場所ですか。文中のことばを用いて二十字以内で書きなさい。

――線⑨とありますが、なぜですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 今、家族がそれぞれ相手のことを理解しようとしているから。
 イ 今、家族の話し合いは自宅ではできないとわかったから。
 ウ 今、家族全員がいつもの場所にもどって座っているから。
 エ 今、両親が自分の話を聞くようとしてくれているから。

三 次の文章は、筆者が自分の過去をふりかえって述べた文章の終わりに近い部分です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

いままでに、いくらかのなつかしさをこめて、ぼくの中学生時代にふれたかもしれない。それはしかし、^①安楽さからいうと、いまよりずっと貧しかった。

夏はやたらに暑く、冬は寒かった。暖房^{だんぼう}もろくなかったので、手がかじかんで、ノートなど取れなかったこともある。夏の夜は少しはすずしくなったかわりに、机のまわりは虫がとびまわっていて、蚊^かにかまれてかゆくてしやうがなかった。

しかし、ぼくとしては、夏は暑く冬は寒く、そして虫に囲まれた生活が、本当は好きだ。それでも、体のほうが、いまではそれにたえられない。部屋をしめきつて、クーラーを入れて、自然と隔離^{かくり}された生き方に、なれてしまった。

道がどろんこのときは、アスファルト道路にあこがれた。そして、道に土が見えなくなると、土のおいをなつかしんでいる。^②これはなんとも、われながら、しようもないものだ。それでも、道がいったんアスファルトでおおわれると、土の時代へもどるわけにはいかない。

^③昔へもどることは、不可能である。「豊か」になったものは、「貧しさ」を求めるわけにはいかないし、便利になったものは、不便を求めるわけにはいかない。

ぼくだって、その昔、^④便利で快適な生活を求めたはずだ。そして、いまそれを否定して、不便な昔をなつかしむなんて、矛盾^{むじもん}した話だ。いまのきみたたちには当然の、現在なりに便利で快適な生活が、ぼくには「便利すぎる」と感ぜられるが、ぼく自身がそうした「便利な生活」を送るよりないのは、まぎれもない事実だ。

きみたちは、もつと便利で、もつと快適で、もつと「豊かな」生活に、あこがれているかもしれない。少なくとも、昔の不便で「貧しい」時代のことを聞いても、なんの感慨^{かんがい}もないかもしれぬ。ぼくにしたら、^⑤「昔はよかった」などと言う気はないし、ともかく、昔はもどらないのだ。

ただ、いまのぼくの気分としては、自然に「豊か」になって、便利になっていくのは仕方ないとして、無理に快適を追求したくない。そう言いながら、暑くなるとクーラーがほしく、歩いてすみそうなどころをタクシーに乗ったりしている。そのときの、屈折^{くせつ}した心、それをきみたちに、わかってもらえるだろうか。

さしあたり、「豊かさ」を求めるときに、ふと気がとがめてみることに、それがいまの時代の「^⑥豊かな」国の人間にとって、意味がありそうに思うのだ。

表面的な生活の上では、人間というものは、案外に早く適応するものだ。二十年前のことなど、すっかり忘れて、今の生活にどっぷりつかることが可能である。

しかし、心の底のほうは、それほど早くは、変われないのではないだろうか。さらに、人間たちの心の共通の底、いわば人間たちの文化とか、情感とかいったものは、それほど変われないのではないだろうか。

これも、表面的には、風俗^{ふうぞく}はめまぐるしく変わる。流行のうつり変わりは早い。それにとまって、生活態度も変わる。表面的に見るかぎり、人間の価値観が、どんどん変わっているように見える。

とくに若者の場合、古いものを持たないだけに、その時代の表層感覚をものにすることは簡単である。いつでも、おとなたちは若者を特別の目で見ようとする。

それでも、表層意識ではなくて、人間たちに共通の、深層の無意識にとつては、時間の流れは意外におそいのではないだろうか。それが、文化といった形になるには、ゆっくりとした時間が必要なのでは

ないか。それで、あまり急速な変化は、深層の無意識によつて裏ぎられたりする。

ぼくはなにも、いままでの秩序感覚を絶対的なものと、考えるわけではない。それも、表層のもので、秩序感覚なんてのは、^⑥、どんどん変わったところで、人間はそれに適応できるものだ。たとえば、都市化が進めば、たいていの人間は、とくに若者は、都市的な感覚で暮らせるようになるものだ。都市には都市なりの秩序感覚が生まれる。それでも、^⑦、ぼくには、その深層の無意識は、そんなに急には変わらな

いのではないか、と思えるのだ。

たとえばぼくは、月に何回かは、東京と京都を日帰りで行往するような生活が、表層では自然なようになつてしまつた。しかし、なにかしら深層では、そうした時間でそれだけの距離を往復することへの、抵抗がある。移動が可能になつた便利さへの抵抗、そんなものを感じてしまうのである。

もつとすごい人だと、昨日はパリ、今日は東京、明日はニューヨーク、なんて人もあるかもしれない。そのうちに、それがめずらしいことでなくなるかもしれない。しかしそれは、何万年もの間自分の目のとどく範囲をなわばりとして生きてきた、このヒトという生物にとつて、異様なことのような気がしないか。

それほどでなくても、東京の友人と、電話で話すことは、いまではなんでもなくなつた。これだつて、二十年前だと、「長距離電話」はかなり特殊なものだつたわけで、ずいぶん便利になつた。しかし、これだけの距離の人間が、いつでも声をかわしうることとは、いくらか異様なことである。

飛行機による遠距離の移動とか、電話による遠距離の通信とか、そうした文明の利益を、べつになん

の気なしに受けながら、ときにぼくには、^⑧、心の底のヒトが、なにか抵抗しているような気がする。

山であつたところが、町に変わる。ぼくは山の緑が好きだが、そうしたことを別にしても、あれだけの山林が、これだけの時間に、市街に変化してよいのだろうか、いつもそんな気がする。

戦後の日本にしても、農村から都市への人の流れが、あまりに急速だつたような気がする。ひとびとの生活はそれに適応しているが、文化がそれに追いつけないのではないだろうか。戦後日本の物質的変化のスピードに、精神的変化は追いついていないような気が、ぼくにはするのだ。

たぶん、社会の急速な変化は、^⑨、いろいろとチグハグなものをもたらすのだろう。そのチグハグさがおもしろいとも言えるし、そうしたものが『進歩』へのブレーキの役を果たすとも考えられよう。そうしたものが見えてきたのも、いまの時代である。

地球に心があれば、ヒトという名のサルは、むやみと急ぎすぎている、と思つていられるかもしれない。それでも、結局のところは、自然のなかでのスピードでしか、進まないと思う。歴史が動いているのはたしかだが、それを動かしているのが、このサルであるかどうか、あやしいものだ。しかし、それでいいのだろう。

問1 線①とありますが、ここでは「貧し」とはどういうことですか。文中から二字で抜き出しなさい。

問2 線②とありますが、

(1)「これ」とはどのようなことを指しますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 毎日の生活が少しでも便利になつたら、昔の不便な時のほうがよかつたと思うこと。

イ いったん変化してしまつと、もはや元にもどすことができないとくやまれること。

ウ 便利になることを望みながら、望みがかなうと以前の良さが思われるということ。

エ 便利で使いやすくなつたのに、人からバカにされけなされるとくやしく思うこと。

(2)「しようもない」とはどういう意味で使われていますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア おもしろくない イ がまんできない ウ 価値がない エ 仕方がない

問3 線③とありますが、なぜ不可能なのですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 自分に都合のよいことはもう変えられないから。

イ 時の流れをさかさまにすることはできないから。

ウ こわれてしまつたものはどうしようもないから。

エ いったん作つたものは元にもどすのが大変だから。

問4 線④とありますが、

(1) これは、どういう生き方ですか。文中から十字程度で抜き出しなさい。

(2) これと反対の生活が書かれているところを文中から二十字以内で抜き出しなさい。

問5 線⑤とはどういう国ですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア ものが行きわたつた国

イ 生活が便利になつた国

ウ みなで仲良く暮らす国

エ お金持ちを目指す国

問6 線⑥と同じ働きものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 今日は愛ちゃんの来る日だからうれしい。

イ 愛ちゃんのポシエットはとてもかわいい。

ウ ケーキは愛ちゃんのだから残しておくの。

エ 愛ちゃんのえんぴつは使つちやダメだよ。

問7 線⑦とありますが、なぜそう「思えるの」ですか。次の文の□にあてはまるように文中から三十文字以内で抜き出し、始めと終わりの五字を書きなさい。

ヒトは□から。

問8 ―線⑧とはどういうことですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 人間の動物的な本能によって、なんとなく落ち着かない感じであるということ。

イ 人間が長い間それでいいと思っていた生活は、ゆつくりとしか変わらないこと。

ウ 人間が持っている過去をなつかしむ気持ちだが、急激な変化をきらっていること。

エ 人間の心の底に持っている自然への愛着は、全くなかりはしないということ。

問9 ―線⑨の例として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 少し古い映画を見ていたら、登場した携帯電話けいたいの大きさにおどろいて笑ってしまった。

イ インターネットで宿の予約をしたが、本当にできたか心配なので電話をして確認した。

ウ 身体具合が悪いのでインターネットで調べてみたが、病気でないと分かり安心した。

エ ポケモンGOGOが開発されたことにより、外出の機会が増え、健康的になった人がいる。

問10 本文を読んで、子供たちが話し合っています。筆者の最も言いたいことを理解しているのはどれですか。記号で答えなさい。

A 農村から都市へたくさんの方が集まったことが、老人ばかりの村を作り、植林などもできず結果的に災害などを引き起こしているんだね。

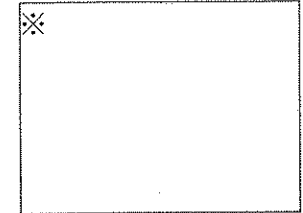
B ぼくも筆者と同じく山の緑が好きなんだ。だから、都会ではなく田舎いなかに住んで、山の緑を守ろうと思っているんだよ。

C 筆者はそんなことを言っているんじゃないと思う。スマホなどの便利なものをみんなが使っているけれど、ねる時間が少なくなり、いろんな問題があつて、便利を求めたらダメだと言っている。

D ダメというより、便利な生活はやめられないけど、何か問題があつたらその時にどうしたらよいか考えようと言っているでしょう。

E ともかく、人間は便利を求めて急ぎすぎたんだよ。ドラえもんのポケットから出てくるようなものにたよらず、コツコツと自分の力で努力することが大事なんだ。

※ には書かないこと



一 問 1

a

b

c

き

問 2

問 3

問 4

1

2

問 5

問 6

問 7

二 問 1

a

い

b

c

お

いなし

問 2

問 3

(1) -----

(2) -----

問 4

問 5

問 6

問 7

問 8

1 -----
2 -----

問 9

問 10

三

問 1

問 2

(1)

(2)

問 3

問 4

(1)

(2)

問 5

問 6

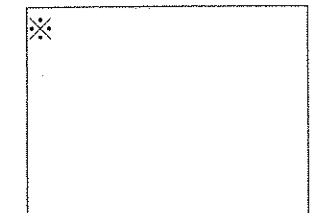
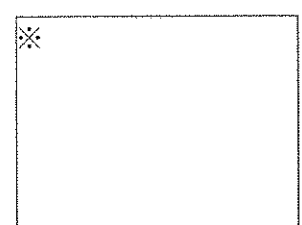
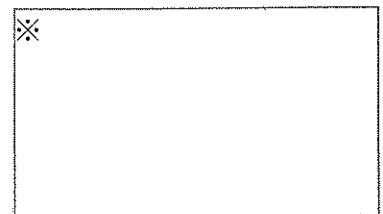
問 7

イ

問 8

問 9

問 10



受験番号

名前